11 月 19 日のメッセージ

聖書：出エジプト記　2：　1－10

「引き上げた（マーシャー）」

「その子はこうして、王女の子となった。王女は彼をモーセと名付けて言った……」(出エジプト記 2:10)

モーセの物語は、やはり特別感があります。失われてしまうしかない命が、時の権力者の子として救い出され、私たちの想像も付かないような劇的な人生を歩むから、なおさらそのように思うのかもしれません。

しかし、「たまたま権力者の娘だった」という要素を外してこの物語を見てみると、また違った面が見えてきます。それは、当時は失われても仕方ないと思われていた弱者の命を、一人の人間が救い出したという物語です。

強者の側からみれば、単なる「気まぐれ」かもしれませんが、神がその手を差し伸べて掬い上げてくださいました(「主は、御自分の民を喜びのうちに／選ばれた民を歓呼のうちに導き出された。」詩編 105:43)。

さらに、異邦人をも用いて神が守ってくださったという点から見れば、この物語は時代も場所も越えて、普遍的な神の救いの物語として立ち上がってきます。ここで行われていることは、「できる者ができる事をできる限り行った」ということだけです。その意味において、私たちにも今、起こりうる出来事としてこの物語は迫ってくるのです。

その視点から世界を見ると、小さな命を奪うことが、なぜ、日常的に赦されているのか、わからなくなります。人間同士の争いが起こってしまうのは、人間の性として、ある意味仕方の無いことなのかもしれません。しかし、その前線で行われる非人道的な振る舞いがなぜ赦されているのでしょうか。

失われるしかなかった幼子の命を救い、民全体を救われた神が、今、この状況を赦されるとは到底思えないのです。

異邦人であるファラオの娘を、ラハブを、ルツを用いて民を救われた神が、今、「自分たちとは違う民だから」との理由で、他者を攻撃し、疎外することを望んでおられるはずがありません(「サルモンはラハブによってボアズを、ボアズはルツによってオベドを、オベドはエッサイを、」マタイによる福音書 1:5)。

イスラエルの民を救うためにモーセを与えられた神は、その造られたもの全てを救うために、イエスを与えられました(「家を建てる人が家そのものよりも尊ばれるように、イエスはモーセより大きな栄光を受けるにふさわしい者とされました。」ヘブライ人への手紙 3:3)。

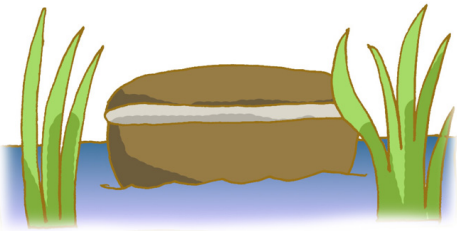
そして、救われたモーセが神のために働くことを期待されたのと同様、イエスによって救いへと導かれた一人ひとりに期待しておられます。

イエスが行われたように、私たちも行動するようにと期待しておられます(「イエスは答えて言われた。『神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。』」ヨハネによる福音書 6:29)。

イエスは、隅に追いやられた小さな命のために働き続けられました。苦しむ人々に寄り添われました。泣く人と共に泣き、喜ぶ人と共に喜ばれました(「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」ローマの信徒への手紙 12:15)。

そして、闇に沈む者たちを光の当たる場所へと引き上げられました(「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。」ヨハネによる福音書 1:9)。

「水の中からわたしが引き上げた（マーシャー）のですから。」(出エジプト記 2:10)

ファラオの娘は、目の前の小さな命を引き上げました。

では、私たちの手は、何を、どこから引き上げることから始めましょうか。